



## 目次 (CONTENTS)

水野広祐教授が新所長に就任…………… 2 <i>Introduction of the New Director, Prof. Mizuno with Director's Inaugural Address</i>	<i>International Workshop on Indigenous Eco-knowledge and Development in Northern Laos …… 11</i>
地域研究統合情報センターが 京都大学に新設…………… 3 <i>Establishment of the Center for Integrated Area Studies in Kyoto University</i>	情報資源共有化・地域情報学合同研究会が 東南アジア研究所で開催…………… 12 <i>JCAS Joint Seminar of Information Sharing and Area Informatics Groups at CSEAS</i>
今春、東南アジア研究所を去られた方々…… 4-6 <i>Faculty Members Who Have Left CSEAS This Spring</i>	京都大学・ホーチミン市間の初めての双方向 ビデオ会議、来る 11 月 11 日開催 …… 13 <i>The First Video Conference on November 11 between Kyoto University and Ho Chi Minh City</i>
<東風南信> Reflections …… 7 35 年前にもどりたいバングラデシュの人びと <i>Bangladeshi Who Wish to Rewind History Back to the Independence</i> 海田能宏 Kaida Yoshihiro	地域研究コンソーシアム活動報告 <i>Report on Japan Consortium for Area Studies</i>
人事 <i>Personnel Changes</i> …… 8-9 京都大学附置研究所・センター主催 シンポジウム 東京で開催 …… 10 <i>First Symposium in Tokyo Held by Research Institutes and Centers of Kyoto University</i>	<海外疾病だより> <i>Getting Sick Here and There</i> …… 14 <連絡事務所だより> …… 15 <i>Letters from Liaison Offices</i>
<i>CSEAS signs MOU with Universitas Cenderawasih</i>	<Visitors' Views > …… 16-18 <i>Colloquia</i> …… 19 研究会報告 <i>Report on Seminars</i> …… 20-21 出版ニュース <i>Publication News</i> …… 22 図書室からのお知らせ <i>Library Information</i>



退職祝賀会での山田勇教授夫妻

(関連ページ 4-5 ページ)



送別会で Hau 助教授から花束を贈られた濱下武志教授

## 水野広祐教授が新所長に就任



2006年1月26日に開催された東南アジア研究所協議員会において、任期満了の田中耕司所長の後任として水野広祐教授が選出された。任期は2006年4月1日から2年間。

水野広祐教授は、1953年生れ。専門はインドネシア地域研究、経済発展論。1978年京都大学経済学部卒業。1994年京都大学農学博士。アジア経済研究所研究

### 所長就任にあたって

水野広祐

今日、地域研究に対する期待はますます高まっています。1963年に始まる東南アジア研究所の諸先輩方、あるいは途上国研究に携わってきた人々の努力の結果、政府さらに社会一般の間にこれまでの研究にたいする評価が高まり、地域研究が学問領域として認知され、そのさらなる発展が期待される状況にあります。

このような中、数々の世界レベルの理論を排出し、すぐれた業績を生み出してきた東南アジア研究所は、地域研究の世界的中核的拠点として社会の要請にこたえるとともに、次世代を見据えた地域研究を発展させるべく組織体制の改革をはかってきました。それは、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科への協力による教育・研究の一体化、「地域研究コンソーシアム」の設立への参加、本年4月の京都大学地域研究統合情報センター設立への協力を通じた、地域間比較を前提にした地域研究発展のための体制作りに現れています。

このような体制を生かし、民主化、地方分権化、ジェンダーや生態環境に配慮した持続的開発、住民の参加・協治、地域の自立などの諸課題を、地域の人々とともに考えてゆきます。地域の人々に対する共感をもって人々の目線からものを見、他方、東南アジア・東アジアの研究者ネットワークを形成して共同で研究し、マクロ的さらにグローバルな視点を

員（1978～96年）を経て、1996年東南アジア研究センター助教授。2003年教授に昇任。

主な著書に、*Rural Industrialization in Indonesia: A Case Study of Community-Based Weaving Industry in West Java*, Institute of Developing Economies, 1996. ▽『東南アジアの経済開発と土地制度』（共編著）アジア経済研究所, 1997. ▽『インドネシアの地場産業——アジア経済再生の道とは何か？』（地域研究叢書No. 7）京都大学学術出版会, 1999.



所長就任の前途を祝して似顔絵をプレゼントされた水野所長（ジャカルタ連絡事務所での所長交替パーティー）

生かします。そして、地域の歴史・社会・生態環境を踏まえた地域研究の作品としてのモノグラフをより多く生みだし、さらに地域に関する、あるいは地域横断的な新たな理論を生み出します。これらの地域研究者としての作業を一層強化してゆきたいと考えます。

このような地域研究の発展のため、東南アジア研究所はさらなる組織改革を行ってゆく方針です。より多くの若手研究者が自由な発想を生かして研究のフロンティアを拡大できる体制作りはその一例です。内にまた外に、より開かれた組織運営も必要でしょう。

新年度をむかえ、また新所長就任にあたり、東南アジア研究所への一層のご支援と、所員一同へのご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 地域研究統合情報センターが京都大学に新設

2006年4月1日、京都大学に地域研究の推進を目的とした新たな研究センターが、全国共同利用施設として設置された。国立民族学博物館に設置されていた地域研究企画交流センターが3月31日をもって廃止されたことともなう措置である。地域研究に関連する全国の研究機関・研究者に開かれた研究組織として、相関型地域研究の推進、地域情報資源の共有化、そして地域情報学の構築という事業を推進することになる。

新たな研究センターの設置に至るまでには、さまざまな経緯があった。世界の各地がグローバル化のなかでどう地域の固有性を維持できるのか。地域研究は対象とする個別の地域の研究に基礎をおきながらも、他地域との比較対照を必要とするようになった。このような関心を背景に、全国の地域研究関連機関の連携を推進する「地域研究コンソーシアム」が設立されたのは、2年前のことである。さらに、人間文化研究機構に設けられた「地域研究推進懇談会」において、地域研究推進体制の整備が検討された。そして得られたのが、①社会的ニーズに応える地域研究の推進、②わが国ではまだ十分に研究機関が整備されていない地域に関する研究の支援、そして③地域間の比較研究や地域情報学などの新たな地域研究の展開、の3つの大きな柱のもとで地域研究推進の整備を図るという結論であった。新センターは、この③の事業を推進する研究センターとして、その設置が概算要求で認められたものである。

新設にあたって、「民博地域研」の教員全員が新センターに異動し、同時に、「京セラ文庫英国議会資料」や一般図書など所蔵資料もすべて京都大学に移管された。東南アジア研究所の教員およびアジア・アフリカ地域研究研究科の教員も加わって、総勢14名の教員で上記のミッションを遂行していくことになる。

4月3日に行われた同センターの銘板除幕式で、尾池和夫総長は「京都大学に設置されたために、全国共同利用のサービスが低下したというようなことになってはいけません。(中略) これまで以上にサ



写真上 尾池京都大学総長、田中耕司地域研究統合情報センター長らが出席して看板除幕式が執り行われた(4月3日)

写真下 民博地域研から京都大学に移管された「京セラ文庫英国議会資料」

ービスが向上したという評価が定着するよう、教職員が一丸となって励んでいただきたい」という挨拶を述べられた。全国共同利用施設として設置されたこのセンターが、いずれは「京大地域研」の名で研究者コミュニティに親しまれるよう、そしてその活動が全国の地域研究の発展に資することができるよう、教職員が一丸となって頑張らなければと気持ちを新たにしているところである。

田中耕司(地域研究統合情報センター長)

## 今春、東南アジア研究所を去られた方々

この春、山田勇教授が定年を迎えられ、濱下武志教授が定年を待たずに龍谷大学国際関係学部に移られた。長津一史助手は、東洋大学社会学部に助教授として赴任された。また、新設された地域研究統合情報センターには、田中耕司教授のほか林行夫教授と柳澤雅之助教授が移られた。

これまでのご尽力に感謝するとともに、今後益々のご活躍をお祈りいたします。



退職記念講演をされる山田教授

去る3月22日に山田勇教授の定年退職記念行事が行われた。山田教授は、京大会館で「地球生態資源の未来」について記念講演をされ、続いてブライTONホテルでの祝賀会で、180名以上の参加者から洋子夫人とともに祝福を受けられた。限られた紙面では紹介しきれない盛大な記念式典であった。当日何度か耳にした以下のキーワードをつなぎ合わせると山田教授のご略歴、活動、業績、およびお人柄が良くわかると感

じた：京都生まれの京都市育ち；京大農学部卒業；探検部；京都大学農学博士；熱帯林生態系研究；森と人；生態資源；グローバルな視点から東南アジアを位置づける研究；全世界を股にかけた合計91回の海外調査；約10万点の写真を撮影；大学院生に臨地研究の指導；多彩な趣味と交友関係；外国人研究者の手厚い接待；「まあええやん」。

山田教授は助手、助教授、および教授として合計23年間東南ア研に在職された。発表された公刊図書の32冊目となる岩波新書『世界森林報告』が山田教授から祝賀会参加者へプレゼントされた。おそらく東南ア研で最後となる古き良き時代の教授であろう。今後は京都大学名誉教授として、1年のうち4カ月ずつ、海外調査、別府にある立命館アジア太平洋大学での教育活動、および京都での活動に従事されるとのこと。

(文責：西淵光昭)

濱下武志教授は、2000年4月に東京大学東洋文化研究所より、東南アジア研究センター（当時）社会文化関連部門教授として着任されました。当研究所では、現地語文献を駆使する歴史学者が長らく不在であり、中国近現代史がご専門とはいえ、朝貢貿易や華僑ネットワークの研究から、東南アジア地域と関わりの深い歴史研究者として迎えられました。着任早々『沖縄入門』が出版され、琉球の歴代宝案に基づいたご研究についてコロキウムで話されたのがまだ記憶に新しいところです。その後も、さらに華人移民と送金の問題、海洋資源についてと、新しい局面から東アジアの海域世界とネットワークを見直され、常に東南アジア研究にとって、また地域研究者にとって刺激を与えてくださいました。拠点大学プログラムにも参加され、東南アジア研究所と中国や韓国などの東アジアにある研究所との研究交流を盛んにする上でも尽力くださいました。華人世界の研究者として、研究成果を諸外国で発表され、特に中国の諸機関・研究者と積極的な研究交流を図ら



3月23日、東南アジア研究所東南亭で開かれた歓送会で、濱下教授と長津助手

れる姿は、地域研究者として、学ぶべきことが多かったと思います。5年間の短い在籍期間でしたが、今後とも私共に身近な研究者でいていただきたいのと同時に、新任の地でのご活躍をお祈りいたします。

(文責：速水洋子)

## 東南アジア研究センター（所）での生活を ふりかえって

山田 勇

東南アジア研究センター（所）での生活をふりかえってみると、いくつか私以外の誰もなしえなかったことがある。ひとつは、初代の所長から現在の田中さんにいたるまで、歴代の所長時代を過したということである。どの所長も大へんよくやられたと思う。センターの発展という意味では、所長の役割は実に大きかったといわねばならない。こんなところは他の研究所にはないだろう。もう一つは、一度農林水産省へ出て、また舞い戻ってきたことである。残念ながらこれも私一人だけである。センターをはなれて外で世界的に活躍をしている人材は多い。センターに長くいる人がムダメシをくっているとはいわないが、一度外へ出た人間はそれなりの味がある。今後、人事交流も含めて再考すべきことではないだろうか。

日本にいる時は昼食のスシを買いに吉田市場へ向う。帰り道にかつてセンターの木造の建物があったところを通る。今はアパートとなっている。農学部の大学院生であった私は、設立当時のセンターの研究会や勉強会に参加した。早朝から、石井米雄、坪内良博、瀬戸口烈司らとオランダ語も読んだ。研究会は熱気にあふれていた。木造の床や階段を歩くドタドタという足音が当時の活気を示していた。10人に満たないセンターは皆燃えていたのである。

それから40年近い年月が流れた。かつては昼食時にすべてが決まっていたのが、今は会議が多くなった。資金は多くなったが長期の調査に出る人間は少なく、短期の調査の繰り返しで、みなやたらと忙しくなった。昔にもどれとはいいたくないが、新たな道をさぐる時にきているように思う。じっくりとフィールドに入り、ガッシリとした本を書く雰囲気をつくるのは、そんなに難しくない気がする。40年の歴史をふまえ、50年目にむかって新たな一步を踏み出すのは今しかない。そういう意味で、大学院生の若い力が生きてくる。東南アジア研究所は教員、院生、事務方、それに客員研究員がまとまりよく動いている珍しい研究所である。今後とも、このよき風潮が大事にされつづけることを祈りたい。

## 私にとっての「地域研究」

濱下 武志

1980年代の中頃、香港の客家研究をおこなっていたイギリスの人類学者バーバラ＝ウォードさんが本をまとめていた頃、私は香港上海銀行のアーカイヴを読んでいた。香港大学の宿舍の夕食が洋食メニューのとき、二人で外へ出て広東料理と一緒に食べながら本の話をつかかった。その後お亡くなりになる直前に出された本が、Barbara Ward, *Through Other Eyes* (The Chinese University Press, 1985)であった。地域を複眼で見る必要性を強調している。

また、時間が現在に飛ぶが、ここ数年、中国の大学生のなかで、ルース＝ベネディクト『菊と刀』の中国語訳『菊花与刀』がベストセラーとなっている現象に興味を覚えている。私の手元にあるものだけでも、7種類の異なる翻訳書が、大陸・香港・台湾から出版されている。これまで何世紀にもわたって中国知識人の日本観の視点は、中国文化の歴史的な影響を受けた「東アジア地域」の一つとしての日本認識の文脈であろう。その視点が、今『菊と刀』という、第二次大戦直後のアメリカの異文化理解と、異文化社会を統治するための著作を通して、日本の歴史文化を理解しようとしている。これは、現在中国自身が、グローバリゼーションの動きの中で、脱亜＝アメリカ視野を強めている動きであると共に、これからの日本への視野の特徴を示唆しており、地域認識の多方向性、複層性を示している。

*Through Other Eyes* の場合も、『菊と刀』の場合の地域認識も、地域ならびに地域関係それ自身が、複合的・複層的であり、内外自他連関を持っていることの反映であり、決して単線・単一的な地域としては存在しえていないということを意味していよう。これに関連して、“外にある”中国について、ソウル大学の圭章閣所蔵の広東商人「同順泰」の資料を、また、プリンストン大学 Mudd Collection 所蔵の、冷戦に向かって揺れ動くアメリカの東アジア・東南アジアの地域政策を論じた会議録を読み返してみたいと思っている。

## ＜東南ア研＞という記憶

林 行夫



1980年当時、東南ア研が主催していたHRAF研究会に初めて参加した日のことを思い出す。先生方の異様なまでの＜経験知＞に圧倒された。その後日本人で最初の研究生にいただいたが、タイに留学するまではそれこそ火傷しそうな＜知熱＞を感じて、心安らかなれぬ所であった。他文化を研究する人文社会系出身者の＜常識＞が常に揺さぶられる。それがその後のすべての礎となった。1993年から教員として14年を数え、実に得難い数多くの経験をさせていただいた。その学恩は計り知れないのに、ずっと非力であったことを恥じている。同時に、諸先輩、同僚、事務の方々のこれまでのご厚情に、心から深謝したい。転任先は地域情報学を掲げる。ビッグバンのように日々押し寄せる地域情報を交通整理して発信することも、求められる役割の一つだろう。しかし情報は変わらない、変わるのは人であり社会である、という足場を忘れず、引き続き東南アジア大陸部の宗教、文化と社会に向き合いたい。その上で情報学の技術で新たな地域像を発掘しえるような、個別の地域からの人間・文化研究に取り組みたい。そうすることが、せめてもの恩返しであり、機関相互間の新たな繋がりを築く術と信じている。

## 会話・対話のたいせつさ

柳澤雅之



2000年4月、東南アジア研究センター（現東南アジア研究所）に助手として採用され、2006年4月、新設された京都大学地域研究統合情報センターに異動した。この間、もっとも印象深かったのは、研究会や会議の席上かわされる日常の会話の重要性についてであっ

た。話し手が、話し手の立場から話をし、聞き手が、聞き手の立場から相手を理解しようとしていては、お互いの主張が相容れず、議論が噛み合わない。ほとんどの人がそんなことはわかっている、相手の立場で理解しようと考えているはずであるが、それでも噛み合わないことがある。ここからがポイントである。相手のことを理解しようとしているのにやっぱり議論が噛み合わない場合、相手がおかしいと考えるのか、いや、もう一步ふみこんで相手の立場から考えてみようとするのか。「日常の会話」を「研究での対話」に置き換えて考えてみると、分野を越えた対話を可能とするのも、もう一步ふみこんで相手の分野の論理を理解しようとするところから生まれるようだ。学際的な研究をするためのトレーニングは、実は身近なところで可能である。

## 東南アジア研究所卒業生として

長津一史

1993年に人間・環境学研究科の大学院生として入学して以来、計13年間東南アジア研究所および大学院アジア・アフリカ地域研究研究科のお世話になった。他に類をみない自由かつ独創的な知的空間で、研究者としての訓練を受けたことを心から誇りに思う。21世紀COEプログラムにより、CSEASとASAFASは制度的に臨地教育に着手することになった。が、振り返って考えれば、CSEASはそれ以前から臨地教育を実践していた。田中耕司さんからCSEAS教員率いる科研グループのスルー諸島やスラウェシ島での臨地調査は、同行した私たち大学院生にとっては臨地教育の場にほかならなかった。エビ養殖池の探し方、干ナマコ流通経路の辿り方から、野帳の書き方、供されたお茶の飲み方、村人や現地スポンサーとのつきあいの作法まで、臨地調査の基本は文字通りフィールドで学んだ。ジャカルタ連絡事務所でのビール片手の議論は、東南亭での研究会の延長だった。2006年4月から東京の東洋大学社会学部で教鞭をとることになった。個人の研究テーマである東南アジア海域世界の比較社会史を探究しつつ、これまで学んだ地域研究を学部教育のなかでいかに伝え、実践していくか。東南アジア研究所卒業生としての課題、そして挑戦であると思っている。

## 35年前にもどりたいバングラデシュの人びと

海田 能宏

バングラデシュ。この国ではかなり多くの人たちが歴史の時計を35年ほど巻き戻したいと思っているようだ。1971年の独立当時に、である。300万人の生命を犠牲にして独立を勝ち取って、バングラデシュという国をつくった。国民みんな、これでひとつになれると思った。1971年3月26日、戦争に先立ってムジブル・ラーマンが独立を宣言したこの日が独立記念日となり、毎年この日の前後になると新聞は回顧記事で埋まり、人びとはそれぞれの思い出に浸る。

人びとは何のための独立戦争だったのだろうかと思っている。独立当時の政権党アワミリーグの支持者は、いま、独立を祝うべきでない人たちが式典を牛耳っているとそっぽを向く。当時、パキスタン側について同胞を殺しまくったあるイスラーム党派が現政権の一部に加わっていると主張する。現在の政権党バングラデシュ民族主義党は当時の歴史を書き換えてでも自分たちの正統性を主張する。独立の立役者ムジブル・ラーマンの殺害に現政権党の創設者が関わっていたと疑う人たちもおり、そして今も両者の娘と妻がそれぞれ最大野党アワミリーグと現政権党の党首である。何につけ、この国では国論が二分され、その結果政治がまったく動かないのであるが、その根はそれぞれが独立戦争とその後の国づくりの課題にどう立ち向かったか、ということに関わっている。したがって、日本人のようにノンポリではいられない。学生はすでに高校生時代から、行政村ユニオンの議長や議員はおろかその下部のワード委員という村びとの組織においてすら、支持政党を旗幟鮮明にする。そのくせ、二大政党間にどれほどの政策の差があるのかは、誰も気にしていない。

この国は最貧国のひとつに数えられ、人びともそう信じているきらいがある。政府は確かに貧しいが、人びとの暮らしはそうでもなさそうである。もう10年以上も年々数パーセントの経済成長を達成し、購買力平価によってGDPを測ると1人当たり



2003年、東南アジア研究センター退職。京都大学名誉教授。現在、JICA長期派遣専門家としてダッカ在住

2,000ドルのラインを超えており、中間層も生まれはじめています。にもかかわらず、この飢餓感はどこから来るのだろうか。ひとつには、経済成長の果実が庶民には回ってこないとの鬱憤。さらには、4年連続で世界一の烙印を押されたTI (Transparency International) の汚職指数。「私たちの国って何なのだろう」という人びとの嘆きが聞こえてくる。

農村では世帯(家族)の経済力というか、格付けは今でも所有農地の多寡で測られる。この根もとにも後ろ暗いところがある。1947年のインド・パキスタン分離前後からヒンドゥー教徒の土地がイスラーム教徒に奪われていった厳然たる歴史があるのだが、この現代史ですら掘り起こすことが難しい。元はといえば大地主はほとんどがヒンドゥーで、人口の3割強がヒンドゥーであったのだが、すでにヒンドゥー大地主は絶え、人口は1割をきった。農地の流動は、必ずしも分離以降だけではなく、20世紀に入ると徐々に進行していたようだが、それにしてもこの地すべりの変化はこの数十年のことである。農村までもが力づくの世界、損得の世界であるその根には、土地移動をめぐる不正義がある。

来年早々には総選挙がある。とにかく政治から不正義を駆逐したい、汚職を一掃したい、清潔な人を候補に立てたいという市民運動がにわかには沸きおこっている。グラミン銀行のユヌス博士はじめ、レーマン・ソバン博士ら一流の知識人が行動を起こしはじめた。私は、こういう大それたこととは関係ないが、それでも農村で人びとの声が地方の行政や政治に伝わるようなシステムそのものの構築を目指して、参加型農村開発という仕事を続けている。

平素から私がこんなことを考えているわけではない。今日は3月26日、人びとの思いが私にまで伝わってきたからにちがいない。

# 人 事

## 教員人事

### <新任>



#### 杉原 薫教授

(2006年4月1日付)

1971年京都大学経済学部卒。  
76年東京大学大学院経済学  
研究科博士課程単位取得、  
96年同大学経済学博士号取  
得。76年丸紅ダブリン事務  
所勤務、78年大阪市立大学

経済学部助手、81年同学部助教授、85年ロンドン  
大学東洋アフリカ研究学院歴史学部レクチャラー、  
91年同学部シニア・レクチャラー。96年大阪大学  
経済学部教授、97年同大学院経済学研究科教授。

[主要著書]

『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書  
房, 1996. ▽『アジア太平洋経済圏の興隆』大阪大  
学出版会, 2003. ▽ *Japan, China and the Growth of the  
Asian International Economy, 1850-1949*. Oxford: Oxford  
University Press, 2005. (編著)



#### 中口義次助手

(2006年4月1日付)

1997年島根大学農学部卒。  
99年大阪府立大学大学院農  
学生命科学研究科博士前期  
課程修了、同年京都大学大  
学院医学研究科博士課程入  
学。2003年京都大学博士号

(医学)取得。同年京都大学東南アジア研究センタ  
ー講師(研究機関研究員)、2005年東南アジア研究  
所教務補佐員。

[主要論文]

The Promoter Region Rather than Its Downstream Inverted  
Repeat Sequence Is Responsible for Low-level Transcription  
of the Thermostable Direct Hemolysin-related Hemolysin  
(*trh*) Gene of *Vibrio parahaemolyticus*. *Journal of Bacteriology*  
187(5), 2005. (共著) ▽ Factors Associated with Emer-

gence and Spread of Cholera Epidemics and Its Control  
in Sarawak, Malaysia between 1994 and 2003. *Southeast  
Asian Studies* 43(2), 2005. (共著) ▽ Pandemic *Vibrio  
parahaemolyticus* O3:K6, Europe. *Emerging Infectious  
Diseases* 11(8), 2005. (共著)

### <昇任>

◇藤田幸一政治経済関連研究部門助教授は2006年  
4月1日付け、教授に昇任。

◇柳澤雅之助手は2006年3月1日付け人間生態相  
関研究部門助教授に昇任。

### <国内客員部門>

任期 2006年4月1日～2007年3月31日。

白石 隆政策研究大学院大学教授は再任。



#### 吉田 信助教授

1993年立命館大学国際関  
係学部卒。同年神戸大学  
大学院法学研究科博士前  
期課程入学、99年同研究  
科博士後期課程中退。同  
年神戸大学法学部講師。  
同法学研究科講師等を経  
て、2004年福岡女子大学

文学部助教授。

[主要論文]

「オランダ国民の形成——一八五〇年国籍法の検討  
を通して」『神戸法学雑誌』50(3), 2000. ▽「オラ  
ンダ植民地統治と法の支配——統治法109条による  
『ヨーロッパ人』と『原住民』の創出」『東南アジア  
研究』40(2), 2002. ▽「包摂と排除の政治力学—  
—オランダにおける市民権/国籍の過去・現在・未  
来」『地域研究』6(2), 2004.



## 外国人研究者人事

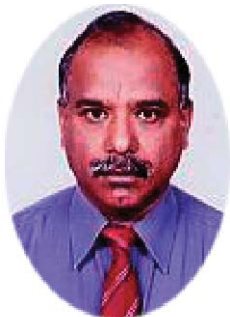
### ■ 外国人研究員

**Khoo Boo Teik** (マレーシア)。マレーシア科学大学社会科学部助教授。2005年12月15日～2006年4月14日。「マハティールからアブドゥラー・バダウィへの政権移行——そのマレーシア政治経済への含意」

**Benlie Abel** (インドネシア)。コーネル大学図書館東南アジアスペシャリスト兼テクニカルサービス・アシスタント。2006年1月10日～7月9日。「河川から道路へ——中部カリマンタンにおける社会文化変容」

**Nawarat Panyangam** (タイ)。タイ国立情報センター図書館司書。2006年1月10日～7月9日。「東南アジア研究所におけるタイ語コレクションの分析」

**Muhammad Salim** (バングラデシュ)。バングラデシュ農業大学農学科教授。2006年2月1日～7月31日。「バングラデシュにおけるファームング・システムの発展——近隣アジア諸国との比較研究」



**Adapa Satyanarayana** (インド)。オスマニア大学人文社会学科教授。2006年4月1日～9月30日。『『カーストの桎梏からの逃避』——南インドのクーリーの東南アジアへの移住：1871～1982年』

### ■ 招へい外国人学者

**Siti Sugiah Mugniesyah** (インドネシア)。ボゴール農業大学農学部社会経済学科講師。2005年12月22日～2006年5月1日。「ジェンダー・農家世帯の生存戦略・貧困——西ジャワ農村における持続可能農業発展」

**Sri Hartoyo** (インドネシア)。ボゴール農業大学経済経営学部開発研究科長。2006年1月28日～2月15日。「環境調和型農村開発に関する社会経済的研究」

**Dwi Rachmina** (インドネシア)。ボゴール農業大学農学部社会経済学科講師。2006年1月28日～2月15日。「環境調和型農村開発に関する社会経済的研究」

**Fe Sumilang Abarcar Delos Reyes** (フィリピン)。HELPラーニングセンター理事。2006年3月23日～5月23日。「文化的相違と経済状況の観点から、能力障害を持つ子供や青年への医学、リハビリテーション、市町村合併事業とサービスの比較」

### ■ 外国人共同研究者

**Sharma Ghanashyam** (インド)。パキム・パラティン大学コミュニティー開発研究センター・プロジェクトディレクター。2005年11月1日～2007年10月31日。「東ヒマラヤにおける農業生物多様性保全に関する研究——伝統的な在来知識と持続的生活の視点から」

**Ekawati Sri Wahyuni** (インドネシア)。ボゴール農業大学人間生態学部コミュニケーション・コミュニティ学科講師・研究員。2006年4月1日～5月31日。「マレーシア・日本における高齢者ケアにおける性差の問題」

## 事務職員人事 (4月1日付)

□大西俊隆総務掛長は、国際日本文化研究センター管理部研究協力課コーディネーターに配置換。後任に、上田和雄京都国立近代美術館庶務課庶務・学習普及係長。

□松下裕之教務掛長は、医学研究科教務・学生支援室専門職員に配置換。後任に、加来恵太滋賀大学企画・国際課国際交流係長。

□神徳智恵総務掛主任は、経済研究所総務掛主任に配置換。後任に、中村美由紀研究・国際部国際交流課国際連携掛職員。

□高田早津紀会計掛主任は、基礎物理学研究所会計掛主任に配置換。後任に、今井淳二人間・環境学研究科第二経理掛職員。

京都大学附置研究所・センター  
主催シンポジウム 東京で開催

2006年3月16日、東京・品川インターシティホールにおいて、第1回シンポジウム「京都からの提言——21世紀の日本を考える」（読売新聞社後援）が開催された。

このシンポジウムは、京都大学の研究所・センターが共同で企画する初めての試みで、今回の東京を皮切りに、10年計画で全国の主要都市を回ることが予定されている。尾池和夫京都大学総長、芦立訓文科省学術機関課長ならびに松本紘京都大学理事の挨拶に引き続き、まず、「危機をいかに乗り切るか？」というテーマのもと、「首都直下地震の被害と減災戦略」（河田恵昭防災研究所所長）と「日本の『構造改革』——何処をどう変えるべきか」（佐和隆光経済研究所所長）という二つの講演があった。次に、「東アジアといかに向き合うか？」というテーマで、「東アジア共同体は可能か？——日・中・韓三国の歴史問題をめぐって」（金文京人文科学研究所所長）と「躍動するアジアと21世紀の日本—



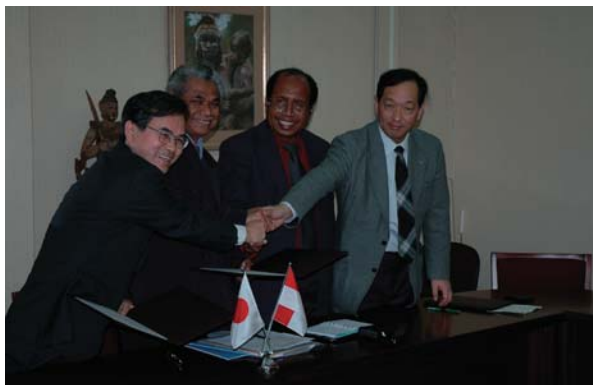
—日本はアジアを越えられるか」（濱下武志東南アジア研究所教授）と題して講演があった。最後に、田中耕司東南アジア研究所所長の司会で、パネルディスカッション「東アジアと日本」が行われ、講演者のほかに、浅田彰経済研究所助教授、清川雪彦一橋大学経済研究所教授らが参加した。ディスカッションでは、これらの喫緊の課題に対して、短期的な問題対策にとどまらず、歴史的視野に立って重層かつ多角的に事態の本質を明らかにすることの重要性が確認された。定員500名の参加募集に1,200名以上の応募があり、当日も最後まで席を立つ人がないほど盛況であった。（文責：米沢真理子）

## CSEAS signs MOU

### with Universitas Cenderawasih

On the afternoon of April 6, the Center for Southeast Asian Studies (CSEAS) and the Graduate School of Asian and African Area Studies (ASAFAS) at Kyoto University concluded a General Memorandum for Academic Cooperation and Exchange with the Universitas Cenderawasih of Papua, Indonesia.

The Memorandum aims at fostering academic exchange and cooperation through programs of exchange of faculty



members and students; exchange of academic information, including library materials and research publications; and joint research activities and research meetings such as seminars, conferences and symposia.

In a one-hour ceremony chaired by CSEAS Prof. Matsubayashi Kozo, Vice Rector Prof. Arifin Wasaraka and Dean of the Faculty of Social and Political Science Prof. Naffi Sanggenafa of Universitas Cenderawasih joined CSEAS Director Prof. Mizuno Kosuke and ASAFAS Dean Prof. Hiramatsu Kozo in signing the Memorandum and delivering speeches to mark the occasion. Also present were CSEAS Assoc. Prof. Patricio N. Abinales, chair of the CSEAS International Exchange Committee, and two special guests, Prof. Eva Garcia del Saz of the Academic Exchange Committee of Kochi University and Prof. Okumiya Kiyohito of the National Institute of Humanity and Nature, who also gave commemorative speeches. Former CSEAS director, Prof. Tanaka Koji, delivered the closing remarks.

Universitas Cenderawasih is the sixteenth institution in Asia with which the CSEAS has signed an MOU.

(Reported by Caroline S.Hau)

*International Workshop on Indigenous  
Eco-knowledge and Development in Northern Laos*

2006年3月15～18日、ラオス北部のウドムサイ県において、総合地球環境学研究所、ラオス国立農林業研究所（NAFRI）との共催による国際ワークショップ“Indigenous Eco-knowledge and Development in Northern Laos”を開催した。このワークショップは、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究：1945-2005」（代表者：秋道智彌教授）および東南アジア研究所とラオス国立農林業研究所との共同研究“People, Environment and Land Use Systems in Mainland Southeast Asia”(PELLUSA)の一環として行われたものである。私たちの研究活動を現地の政府職員や住民に知ってもらい、これまでの研究成果を彼らと共有するとともに、彼らからのフィードバックを踏まえて研究活動の新たな展望を拓くことを目的としたものである。

ワークショップ第1日目は、ウドムサイ県農林事務所の会議室で開催した。日本から19人、NAFRIとビエンチャン市から5人、ウドムサイ県などから24人の合計48人が参加した。参加者が主に現地政府職員で英語だけでは十分にコミュニケーションできないので、ラオス語と英語のパワーポイントを用意するとともに、基本的にラオス語で発表し、英語へ逐語通訳した。生態系と遺伝資源保全、焼畑農業と森林保全、農牧業とその普及活動に関する3つのセッションで12の発表があり、熱心な討

論が繰り広げられた。

第2日目は、アイ村へ移動して開催した。アイ村は、2003年より私たちの研究プロジェクトの共同調査地となっている。参加者は、日本から19人、NAFRIから4人、県・郡職員が7人、周辺の18カ村から30人、アイ村の村人90人以上で、合計150人以上であった。会の主役が村人なので、日本人が、ラオス語のパワーポイントを用いて、ラオス語で、アイ村でこれまでで行ってきた研究活動や日本での稲作を紹介した。途中、会場に入りきれない村人が、近くの家屋に集まりすぎてベランダが倒壊するなどのハプニングもあったが、テレビ局が取材にくるなど大盛況であった。

このワークショップが、私たちとラオス社会の信頼関係をさらに強固にし、現地政府職員や村人と私たちの共同作業である研究のさらなる発展に貢献することができれば望外の喜びである。また、ワークショップのオーガナイザーとして、村の役員の人たちや県との話し合いに立ち会い、ワークショップ開催に至る村内や村と県との合意形成の過程をつぶさに体験できたことも大きな収穫であった。

（文責：富田晋介）



ワークショップ第1日目の集合写真  
（県農林事務所の会議室にて）



ワークショップ第3日目のエクサカーション  
（火入れの準備を進めている焼畑地にて）

## 情報資源共有化・地域情報学合同研究会

東南アジア研究所で開催

昨年末12月5日に東南アジア研究所にて、地域研究コンソーシアム下の地域情報学研究会と情報資源共有化研究会の合同研究会が開催された。テーマは、「利用者及び共有システムから見る非文字資料の情報資源共有」である。コンソーシアム加盟組織メンバーを中心に20名以上が参加し、いわゆる、情報屋、図書館が、地域研究者とともに「地域研究」に関する情報資源共有のあり方を論じる貴重な場となった。

以下の詳細にあるように、午前の部では、各地域の資料を扱う、もしくは利用する立場から、多メディア・多言語資料の収集と発信の現状と課題に関する報告があり、午後の部ではシステム関係者が直面している、統合検索システム開発上の課題が具体的な事例とともに報告された。また、番外編として、情報資源共有化研究会が昨年9月18～26日に初めての試みとして行った、スタディ・ツアーの報告がされた。

今回のスタディ・ツアーには、ヨーロッパにおける情報資源共有化の現状と問題点の調査や、多メディア・多言語資料の収集と地域研究への応用方法の研修を目的として、オランダ、スウェーデン、デンマークのアジア研究関連機関や出版社の訪問な



オランダ王立言語地理民族学研究所 (KITLV) の書庫にて資料の紹介を受ける参加者

どが盛り込まれていた。参加者からは、研修内容に対する高い評価のみならず、共通の課題を持ちながら普段なかなか知り合う機会の少ない図書館/資料部門担当者の連携の強化という側面が支持された。加えて、スウェーデンでは、ルンド大学で行われた、European Association of Japanese Resource Specialist (日本資料専門家欧州協会)にてグループで発表する機会にもめぐまれ、ヨーロッパのアジア資料関係者との相互交流も促進されたといえる。

### <情報資源共有化・地域情報学合同研究会

#### プログラム内容>

趣旨説明 国立民族学博物館地域研究企画交流

センター 押川文子

—資料からみる—

「非文字資料のデータベース構築と研究資料共有化」

島根県立大学 貴志俊彦

「地域研究情報資源確保のために——ロシア・東欧関係資料の分布状況から考える」

北海道大学スラブ研究センター 兎内勇津流

国立民族学博物館地域研究企画交流センター

帯谷知可

情報資源共有化研究会 第1回スタディ・ツアー報告

—システムからみる—

「Z39.50 と Dublin Core をもちいた統合検索システムのための民族学標本資料データベース」

国立民族学博物館 山本泰則

「歴史資料の Dublin Core へのマッピングと

統合検索」 国立歴史民俗博物館 安達文夫

コメンテータ 国文学研究資料館 原 正一郎

討論 司会：京都大学東南アジア研究所 柴山 守

なお、研究会当日は12月初旬にはめずらしい全国的な大雪に見舞われ、一部の発表者、参加者の方々には、文字通りご足労をお掛けすることになり、深く感謝する次第である。(文責：北村由美)

京都大学・ホーチミン市間をつなぐ  
初めての双方向ビデオ会議

来る 11 月 11 日に開催

2006 年度に最終年度を迎える 21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、東南アジア研究所)は、「総合的地域研究の新地平——アジア・アフリカからディシプリンを架橋する」をテーマに、来る 11 月 11 日及び 12 日の 2 日間、京都大学百周年時計台記念館で国際シンポジウムを開催する。また、ベトナムでは、日本ベトナム空間情報学コンソーシアム・ベトナム国家大学共済の GIS-IDEAS2006 国際会議 (International Symposium on Geo-informatics

for Spatial-Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences) が、「Geoinformatics for Regional Sustainable Development」をテーマに、11 月 9 日から 11 日の 3 日間ホーチミン市の中心部、Rex Hotel で開催される。双方のシンポジウムにおいて、「地域情報学セッション」が予定され、11 月 11 日 (土) 午後 3 時から 2 時間半 (日本時間) にわたって京都大学・ホーチミン市間で初めての双方向ビデオ会議により、地域研究における空間情報学の応用について議論される予定。

このビデオ会議には、ハノイ鉱山地質大学、フエ大学、ベトナム社会科学院、同科学技術院、アジア工科大学 (タイ) などから関心が寄せられている。双方のシンポジウムに多くの参加者を期待する。(文責: 柴山 守)

2004 年 4 月に発足した地域研究コンソーシアムが 2 歳になろうとしている。東南アジア研究所を含む 4 拠点組織が中心となって、よちよち歩きからスタートした試みであったが、すでに 69 組織が加盟する立派な学術ネットワークへと成長しつつある。とはいえ、まだ改善すべき点は多い。そこで、より持続的で実効性のあるネットワークへとさらに成長していくために、活動内容や運営体制の見直しを進めている。

その要点は以下のとおりである。

発足後、4 部会・3 研究会を中心に実施してきた諸活動のうち、それぞれの組織の活動を前提とした情報交流・発信には多くの加盟組織が参画した。また、社会連携、教

地域研究コンソーシアム  
活動報告

育・次世代育成、資料情報の共有化などの具体的な課題に向けた取り組みは、参加組織数はまだ限られているものの、徐々に軌道に乗りつつある。

これに対して、アンブレラ・プログラムなどの研究活動自体に関わる活動分野への参加は限定的であった。それぞれの加盟組織はすでに独自の研究プロジェクトをもっており、かつ研究者個人も個別課題の研究を行っている状況のもとで、さらに研究活動を

を上乗せすることが困難な状況であることを反映していると考えられる。

結果的に見れば、コンソーシアム活動の第一の目的である組織を超えた情報交流・発信、および個別の具体的課題への連携した取り組みの重要性があらためて確認されたと言えよう。したがって今後は、これらの活動領域・機能を重点化することが必要である。

試行錯誤を重ねながら進んできた 2 年間だったが、対象地域を越えた連携活動や地域間比較に関して、数多くの種を播くことができた。地域研究に新たな波を起こすために、これらの種を少しずつ育てていきたいと思う。(文責: 河野泰之)



## 海外疾病だより *Getting Sick Here and There*

### まだ生きています

浜元 聡子

「二度目のデング熱はさらに重篤になるから注意!」。1998年に最初のデング熱にかかり、よれよれとなって帰国した際に、多くの人からこのように言われた。以来、調査地では、ホテルの中であれ、田舎の村であれ、食事中はもちろん、虫除け対策を怠らないできた。持ち物はすべて除虫菊くさくなり、虫も人も近寄ってくれなくなった。デング熱は、日本ではマalariaほどに知名度はないが、インドネシアでは、危険な病気として知られる。雨季になると、今日は何人が亡くなりました、\*\*病院はデング熱患者で満員、というニュースが頻繁に流れる。ところが、デング熱には予防薬も特効薬もない。入院しても、点滴以外に手当を受けないのである。私の二度目のデング熱は、帰路のシンガポールで発病した。科研調査の帰国日直前。あとは帰国するだけだから、何があってもすべて私の責任ですと一筆認めた上で、搭乗許可が出た。チェックインの時点で熱は39度、病気であることが一目瞭然であったため、医務室へ連れて行かれたのだった。帰国後、華々しく救急車で病院へ運ばれたが、感染症の専門科のある病院でも、点滴以外の治療は原則的におこないま

せん、熱は出るだけ出させて下がるのを待ちましよう、と説明を受けた。40度の熱をひたすら耐える。主治医の先生が、二度目だから余裕でしょうと、熱の痛みを和らげる冗談を放つ。入院中の検査では、アメーバ赤痢、カンピロバクター、ブラストシスチスといった細菌類もまた発見された。これらの細菌類は、顕著な自覚症状がないため、入院していなければ、発見されなかった可能性があるとのこと。この虫退治ができただけでも、デング熱にかかってよかったともいえる。二度目の罹患の原因は、油断の一言に尽きた。帰国直前に、あまりに疲れすぎて、蚊取りを焚く前に寝てしまったのだ。12日間の入院で済み、今回もなんとか生き長らえたのは、デング熱には全部で4つの型があり、続けて同じ型に罹らない限りは、さほど重篤にならないからとのことだった。さらには初回からの8年を経て罹患したため、前回値は無効に近い状態になっていたとのこと。よりショック性の高いデング出血熱に罹った場合は、「二度目」がないとも聞く。蚊に刺されないようにするのは、至難の業ではあるが、ゾンビあるいは不死鳥のごとく、熱帯感染症とつきあっていく覚悟はできたかもしれない。(研究所教務補佐員)

### 医師からのコメント

松林 公蔵

デング熱は、頭痛、全身の痛み、顔面の発赤、のどの痛みが続いて、悪寒、40度の発熱、激しい関節痛、下痢、目の奥の痛み、リンパ節の腫れ、など激的な症状を呈し、4日ほどでいったん軽快しますが、その後2日ほどたつて再燃します。多くの場合良性で自然に治りますが、完全に治るには数週間かかるのが特徴です。一部出血型があり医学的な処置を必要とします。デング4型のうち、以前に異なる血清型にかかったことがある場合に出血型になりやすいといわれます。出血型であっても、入院して適切な処置をとれば、多くの場合

救命可能です。浜元さんは、「点滴以外の治療がなく」とおっしゃいますが、脱水と血液の水・電解質バランスを補正する「点滴」はきわめて重要で、病院では、出血型にいたる可能性も考慮して、血小板の減少を補う輸血、ヘパリンという薬などを用意し待機します。デング熱で亡くなるのは多くの場合、入院し適切な処置がとられなかったケースです。また、デング熱の診断は、臨床症状だけからでは困難で、検査室の助けを借りなければなりませんので、デング熱を疑って正しく診断され、直ちに入院された浜元さんは、たいへん賢い方法をとられたと思います。「蚊よけ」が最大の予防ですが、100%は困難なので、面倒がらずに病院を利用しましょう。(研究所教授)

## 連絡事務所だより

## Letters from Liaison Offices

バンコク

Bangkok

柳澤雅之

タイの3～4月は暑季ともいわれ、一年中でもっとも暑い季節である。今年のバンコクの暑季は、反タクシン運動の盛り上がり、繰り返されるデモ、4月2日総選挙、タクシン首相の辞任、補欠選挙の実施など、政治的にもヒートアップした季節となった。そんな中、3月25日、バンコク連絡事務所で、東南アジア研究所新所長のお披露目パーティーを開催した。2005年度まで所長を務めた田中耕司教授と、新年度から所長を務める水野広祐教授とが来タイし、タイに在住する研究者とその家族32人をご招待した。その中には、遠方からかけつけてくれたタイの歴史学の大家やタマサート大学副学長、その他学部長や研究所長など、タイの学术界で重要な位置を占める人たちが含まれていた。東南アジア研究所のスタッフがこれまで築き上げてきたタイとの深い関係を反映しているといえよう。

しかし、参加者からは、東南アジア研究所とタイの研究者の協力関係について要望もいただいた。それは、協力関係といっても、どうしても人と人との関係がベースであり、そのため、協力関係のある研究分野に偏りができること、もうひとつは、一方の側の研究者の

異動などによって連絡が途絶えがちになると、協力関係が場合によっては途切れることであった。

組織間の協力関係といっても、実態としては人と人の関係にならざるを得ないという事情はよくわかる。しかし、組織間で協力関係を築くことには、大きなメリットもある。たとえば、いずれ活躍するかもしれない、あるいは、直接の関係はないがすでに活躍している優秀な人材と協力関係を取り結ぶことができる。組織間で提携し、人的に緩やかなネットワークを維持しておくことが双方にとってのメリットであることは誰も否定しないであろう。

しかし、組織間の協力関係は難しいようだ。協力関係にある両者があまりにも頻繁に会わなくてはならないのでは重荷になる。逆に、あまりにも疎遠だといざ協力したい時に遠慮がでる。その中間くらいをなんとか維持し、必要に応じて協力関係を取り結ぶことができるような関係が、もっとも息の長い関係なのかもしれない。パーティーの参加者からの要望は、タイ側から投げられた球である。それをどう投げ返し、息の長いキャッチボールとするかは、東南アジア研究所の対応次第である。(地域研究統合情報センター助教授)

ジャカルタ

Jakarta

西スラウェシのデモ屋さん

岡本正明

西スラウェシ州の州都マムジュ市の小さな食堂で私、元活動家の若手大学講師S君、そして中年の運転手の三人で食べていたときのことである。食堂の入り口近くで食事をしていると、奥の方から黒革のジャケットを着た青年がこちら側に向かってきた。年頃はS君と同じぐらい。165センチぐらいで中肉、日焼けした黒い肌、太くて濃い眉、ボサボサの髪の毛。カッと見開いた目はギラギラとして血走っており、瞳孔は揺れて焦点が定まっていない。激しい緊張感を周りにまき散らしている。普通の青年ではない。一瞬、犯罪者か暴力団の切り込み隊長かと思った。

その青年が私たちの横を通り過ぎたとき、S君が右手を挙げ、親しげに「おっ、久しぶり」と彼に声をかけた。青年がS君の方を向いて、「おっ」と返した。声に親しみはさしてなく、抑揚もない。彼はS君と少し話ただけで食堂を去っていった。

私はS君に早速、「今のは誰？」と尋ねた。「デモ屋(demonstran)」という返事が返ってきた。デモ屋とい

うのは、政府や議会などにデモを頻繁に行う人といった意味であり、民主化後のインドネシアでは各地でこうした人たちが登場した。なかには、金儲けを目的とするデモ屋もいる。

それにしても、人の素性を尋ねたときのS君の答えが「デモ屋」というのには驚いた。しかし、その青年が「デモ屋」と呼ばれる理由も彼が緊張感を放つ理由もS君の説明で分かった。

この青年A君はNGO活動家である。他の活動家とともにマジェネ県議会前で議員の汚職批判デモを繰り広げ、汚職議員たちを牢獄に送り込むことに成功している。当然ながら彼を邪魔者扱いする者もたくさんいるに違いない。A君もまたそのことは重々承知しているからこそ、あの緊張感が生まれているのである。

さてこのA君は、今年、西スラウェシ州選挙監視委員会の委員に選ばれた。本委員会は6月の西スラウェシ州知事選挙を監視する役割も担っている。自由・公正な選挙となるのかどうかは、彼の手腕にもかかっている。お手並み拝見である。(研究所助教授)

# VISITORS' VIEWS

## THE LOCAL IN THE GLOBAL

By Ratana T. Boonmathya



Gion quarter is a lively cultural entertainment zone of Kyoto. In 1990 the Kyoto City municipality initiated a program to preserve Gion's *ochaya* (teahouses) and *machiya* (traditional wooden houses) with the aim of preventing the destruction of Kyoto's cultural heritage.<sup>1)</sup> Initially, the plan was

drafted without participation from local house owners, who worried about what the building regulations would be. They were then led by an influential businessman whose family has run a traditional *ochaya* for over 100 years in Gion. Together they decided to protect this cultural landscape because of their pride in and appreciation of traditional wooden houses and the long heritage of cultural entertainment practice connected with this housing space.

Several interactive tripartite dialogues and meetings took place between representatives of the Kyoto city municipality (accompanied by an architectural consultant hired by the municipality), the local urban planning committee, and owners of traditional wooden houses in the area. The discussion results were rather positive and accepted by all. There were no serious conflicts between the municipality and the local people. They finally agreed to preserve their wooden houses on the south side of the Gion quarter in the traditional form as existed in old times.

Walking along the south side of the Gion, I was struck

---

1) Data for writing this short essay derives from two sources: attending a seminar and interviewing a key participant. My thanks go to Tamaki Endo, JSPS Fellow at CSEAS and a PhD candidate from The Graduate School of Economics, Kyoto University, for taking me to the seminar on urban planning and development at Gion on February 25, 2006. Also, my appreciation goes to the key participant, interviewed on March 7, 2006, who does not want to be identified. She has been involved in promoting local participation in Kyoto city planning for many years.

by the rewarding joint effort of local community and municipality in preserving cultural landscape, reflected in the exquisiteness of those traditional wooden houses that have lasted for centuries. Along several small lanes of these houses, the fine-looking pavement was neatly tiled. I was happy not to see high-rise buildings and gigantic colorful billboards along the way as have appeared in several other metropolitan cities. To preserve their cultural landscape, owners of those traditional houses bear most of the building maintenance costs; the Kyoto City municipality subsidizes one-third of their total expenses. Today, the preservation of these traditional houses has precious value in the global capitalist contexts of Kyoto and Japan as a whole, as their charm helps attract significant numbers of local and international tourists to visit Gion quarter annually.

(Visiting Research Fellow)

## A WALK IN NISHIKI MARKET

By Khoo Boo Teik



On New Year's Eve, I took a quiet ethnographic walk in Nishiki Market. Nishiki has been one of my favorite places in Kyoto since my first visit to the city in 2002. Given the occasion, it was more exhilarating than usual to take in the sights (of many varieties of food and non-food wares), sounds (of stall keepers, their customers, and surrounding activities), and smells (of fresh, prepared, and cooked food). Thrust into the narrow walkway between the two rows of stalls were so many people and, at various points, such long queues (of customers waiting to purchase specialty items) that I was content just to be "in with the crowd." (Rather, one had to be in with the "correct half" of the crowd or be jostled by an onrush of the "opposite half.") Unable to speak Japanese, I couldn't catch the drift of myriad conversations taking place. Even so, there was no mistaking the excitement of New Year's Eve marketing in Nishiki.

Nishiki then reminded me of different neighborhood



or community markets—including wet, open-air, and flea markets—I’ve visited, at home in Penang, Malaysia, or in foreign countries. I’ve found most of these markets attractive for their offerings, people, and environments. More than that, the local, peculiar, or unique customs of buying and selling are a constant reminder that such markets are sites where commerce and culture meet, where transactions take place “face to face,” and human relations are played out on a human scale. Some economists and ideologues praise “The Market” for its supposed virtues, unperturbed by its socially disruptive and destabilizing “mechanisms.” How refreshingly different is a small and intimate market such as Nishiki from that abstract, distant, and hegemonic Market beloved of market fundamentalists!

(Visiting Research Fellow)

### JISHU JINJA, I AM THINKING

By Benlie Abel



In 1972 *Life* magazine published a dramatic photographic essay by W. Eugene Smith, “Tomoko Uemura in Her Bath.” It shows Ryoko Uemura, holding her severely disabled daughter in a bath. Tomoko was poisoned by organic mercury compounds while still in the womb.

The photo made Minamata disease and its consequences known around the world. I was then in 6th grade of my elementary school in Tandjung Karitak, a village in the upper Kahayan River of Central Kalimantan Province, knowing nothing. I found this story seven years later at public high school. It was the inaugural year of the National Institute for Minamata Disease in Minamata City. The image of Smith’s picture haunted my innocent, inexperienced mind. I blamed the companies which I saw as representatives of the rich, always causing hardship in the lives of the poor.

I learned more in later years. While the polluting company covered up the tragedy and evaded responsibility for a long time, with this crisis, victims joined with supporters and citizens’ movements to arouse public opinion. This movement aimed at upholding the basic human rights of the people and appealed directly to the full humanity of all persons. I’ve recently read a report, “Minamata Disease Turns 50, Still Taking Toll: Suffering, Discrimination Continues in Lead-up May 1 Memorial Tribute.” It brought back memories of my reaction many years ago.

In Kiyomizu-dera, I saw youngsters giggling with their

friends while walking with closed eyes, feeling their way along by touching stones. This is a shrine called Jishu Jinja where the youngsters had come for a wish, prayer, and vows of love by touching the stone and placing their *ema* there. Seeing this, I reflected on the idea of love beyond romantic wishes. Why don't we all place our *emas* here for the God of love to love us? On May 1, as a memorial tribute, we should reflect and offer a vow of love for all. We should join in the awareness of Minamata disease and of the humanity-shattering danger of mercury and other toxins; one has only to think, for example, of Buyat Bay in North Sulawesi, Indonesia. I am thinking of love, love for our planet, for peace. I am thinking of all Minamata experiences and lessons to be shared to prevent more environmental destruction caused by our economic greed. Save our future as if it were one of our loved ones. This is my *ema*.

(Visiting Research Fellow)

### NOSTALGIA FOR THE PAST IN JAPAN

By Muhammad Salim



Whenever I am asked by my countrymen what kind of place Japan is, my answer is short: “beautiful.” Why? Living in Japan is safe and pleasant. Japan fascinates me the more I study its culture and people and observe its charming beauty. I always feel nostalgia for the past in Japan. Kyoto in particular is my second home.

This is my third time in Kyoto. I first came to Japan in 1987. I still cannot forget the day six years later, on my return to Kyoto, when I found my wallet missing. I must have left it absentmindedly in a public telephone booth. I immediately rushed to a nearby police box and explained my problem. It was an easy task for the policeman to discover that it was being safely held at Imadegawa police station. I discovered how safe Japan is.

Though this is my third visit to Kyoto, it is the first time I have been accompanied by all my family members. We owe our host parents, the Yamakawas, for keeping us free from homesickness during our earlier and present stays. I can recall countless good memories with them. About fifteen years ago, for example, Mrs. Yamakawa would visit our home everyday to help my wife bathe our new-born baby. I recall also that our host parents went all the way to Bangladesh to visit us twice. My memories of Ms. Nishi are also precious. Besides teaching us the Japanese language, she used to take care of almost all aspects of

our life in Kyoto.

My time at CSEAS has been very stimulating. I enjoy the discussions at the frequent seminars held on various topics on Southeast Asia. I am very grateful to Dr. Kazuo Ando, who invited me and is a most cooperative host. I hope that my stay will produce fruitful future collaboration between the Center and Bangladesh Agricultural University, my own university.

(Visiting Research Fellow)

### SPRING IN KYOTO

By Nawarat Panyangam



As winter turns to spring, flowers bloom, pretty birds begin to sing, soft breezes blow, the river comes alive, the sky and the sun are clear. This is a beautiful place called Kyoto. I am pleased to be visiting Kyoto, a city of ancient architecture, as well as culture, fine art, many kinds of food, nature, and friendly people. Conveniently

located in Kyoto are universities, temples, and shrines, where people come to study, learn many kinds of knowledge, and enhance their belief in religion. For this reason one can say that Kyoto is a peaceful city.

I work at the National Library of Thailand. The NLT is like any other library, but it also has a collection of “rare books.” The collection contains rare editions of books published in Thailand and foreign countries. The most interesting rare books are “Thai cremation books.” The first memorial book for a cremation ceremony, or cremation memorial book, was published by King Chulalongkorn for the cremation ceremony of Queen Sunantha Kumariratana and their daughter in B.E. 2423 (1880). In about 1986, the CSEAS library of Kyoto University purchased many cremation volumes from Mr. Charas Bikul. Collections like this are seldom obtainable outside Thailand. I am very interested in studying these books and in cataloguing the articles in Thai cremation books. I am therefore happy to study here and work on this project.

I would like to express my gratitude to Professor Koji Tanaka, director of the Center for Integrated Area Studies (CIAS), Professor Mizuno, director of Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University, and the International Committee for giving me the opportunity to be a visiting research fellow. Special thanks are also due to Ms. Yumi Kitamura, head librarian, and her library staff, who have helped me in my work in the Library. Thanks also to staff members of the International Office and staff members of the Research Department of the Center, who have arranged and prepared all

my official documents. Thanks to Ms. Yonezawa and her staff at the Editorial Office for arranging this newsletter. Finally, I would like to thank all the people of Japan for their warm reception and contagious friendliness.

(Visiting Research Fellow)

### CYCLING IN KYOTO

By Phanu Uthaisri



I love cycling. Back in Thailand, I cycled every Sunday with the Chiangmai Sunday Bicycle Club.

In Kyoto, I see that many Japanese, young and old, like to ride bicycles. Here, a cyclist can ride on the pavement or along a bicycle lane. The Kyoto terrain is level, the air is fresh, and cyclists can safely

use the zebra crossings. Hence, a bicycle is a convenient vehicle to use for travel in and around Kyoto.

Many of the Center’s Visiting Fellows use the bicycle. Sometimes we cycle together to visit different places. Last year, I went on a trip organized by some Fellows who lived in Shugakuin International House. We cycled all the way to Arashiyama! Starting from Shugakuin, we passed Ichijoji, a historic location. At Ichijoji, one of Japan’s most famous samurai, Musashi Miyamoto, fought against the Yoshioka School. During that battle, Musashi created his “two sword” technique.

After Ichijoji, we turned west and rode along the Takano River until it joined the Kamo River. The confluence of the two rivers creates the Y-shaped “Kamogawa” shown clearly on every Kyoto map. (Some of us often cycle along the river bank to reach the Center. We like the river scenes because of the clear water and the presence of many birds, including ducks, teals, egrets, and hawks.)

We passed the Imperial Palace. Many city residents come to the large and beautiful Palace grounds for walks or exercise. We continued west but stopped at Kitano Tenmangu to take some photos of the plum blossoms. Then we cycled along Marutamachi-dori until we arrived in Arashiyama. We visited Tenryuji temple, a World Heritage site. We could see monkeys on the nearby mountains.

We rested before returning to Shugakuin. It was a long way to cycle to and from Arashiyama, but I enjoyed it thoroughly. I may go again in spring with some cycling enthusiasts.

(Visiting Research Fellow)

## COLLOQUIA

© “The Recent Development of ‘Urban Buddhism’ in Northeastern Thai Villages: A Preliminary Report” by *Hayashi Yukio*, December 22, 2005.

Thammakai, a meditation movement, has been described as a new Buddhist movement supported by urban-based “middle class” Thai citizens since 1970s. My recent research in northeast Thailand shows its “extension” to rural areas in the past decade. The number of native novices who participate in Thammakai activities has been increasing due to the scarcity of native monks who stay at their village temples. Those persons who connected with Thammakai were native school teachers interested in meditation. They have been responsible for innovating rural Buddhist practice. However, the village that first accepted Thammakai in 1987 divided into two villages in 1994 due mainly to conflict arising from the Thammakai rejecting local rituals. This case shows two kinds of practices among Buddhists in the same locale and the differentiation of people according to their social experiences.

© “The Bottom of Indianization in Southeast Asia: Comparing Locally Existing Technologies of the Hani of Yunnan and the Apatani of Arnachal Pradesh” by *Ando Kazuo*, January 26, 2006.

Since I joined CSEAS in 1996, I have visited many peripheral areas between India, China, and Southeast Asia: Arakan (Burma), Honha (Yunnan), Chittagong (Bangladesh), Assam, Manipur, Megaraya, Arnachal (India), and Tibet. The experience of visiting Tibet was a shock for me because of its “Sinicization.” India and China are the oldest civilized countries, and there is a clear difference between them. While many ethnic identities, such as Bengali and Bihari, still exist in India, the Han ethnic identity has become dominant in China.

Why have many ethnic identities been able to survive in Southeast Asia? I have reached a conclusion: Indianization and Sinicization are much different. The image of “Indianization” misleads us in our understanding of Southeast Asia. The people of Southeast Asian willingly selected Indian culture—but not

Indian territorial hegemony. They were not “Indianized.” And they may yet deny “Chinese” hegemony. This idea has grown as I studied the recent change of plough type from the Indian type to the Chinese type in Arakan and found similarities in rice-terrace farming between the Apatani of Arnachal Pradesh and the Hani of Yunnan.

© “A Three Dimensional Study of Maritime East Asia? Searching for Interconnections between Area Studies and Maritime East Asia” by *Hamashita Takeshi*, February 23, 2006.

There have been many different dimensions of argument about area studies in accordance with different methodologies, different conditions, and different objectives. However, studies of maritime East Asia usually did not join these arguments, but rather tended to focus on connections and networks of trade and migration. Here, rethinking the characteristics of previous area studies, I try to discuss different dimensions of area studies through the lens of maritime East Asia.

© “The Islamization of Maritime Sama in Malaysia: Local Contexts and Meanings” by *Nagatsu Kazufumi*, March 23, 2006.

The Sama Dilaut, or maritime Sama, in Sulu, Philippines, and in Sabah, Malaysia, were long stigmatized by dominant Muslim groups as outcasts cursed by Allah. Although they began to profess Islam in the 1950s, the Sama Dilaut in Sulu still remain marginalized in the local socio-religious arena. Since the 1970s, however, the Sama Dilaut in Sabah have established their status as Muslim. My presentation aimed at understanding the dynamics of the latter’s Islamization by relating the process to changes in social circumstances surrounding Islam, such as the “institutionalization” of religion in Sabah and the subsequent re-orientation of the local concept of religious authority.

## ◆ JSPS Core University Program Workshop

“Network Theory in Asian Studies: Its Performance and Challenges to Next Steps,” March 6.

Hamashita Takeshi (CSEAS) “In Retrospect. Network Studies 1980–2000: Problems and Prospects” ▽ Fan Ke (Nanjing University) “Network That Works: Ways of Muslim Identity Construction among the South Fujian Hui since the 1980s” ▽ Liu Hong (National University of Singapore) “Network, Identity and Overseas Chinese Studies: Towards a Re-examination of Regional Orders in 20th Century East Asia” ▽ Nordin Hussin (Universiti Kebangsaan Malaysia) “Networks of Malay Merchants and the Dwindling of Melaka as a Regional Trading Centre 1780–1830” ▽ Hamashita Takeshi (CSEAS) “Networks as the Foundation of Regional Economic Growth and Crisis: Remittance of Overseas Chinese and Their Financial Networks” and general discussions.

## ◆ JSPS Core University Program Seminar

Chalongphob Sussangkarn (Thailand Development Research Institute) “East Asian Financial Cooperation and Integration” ▽ Shandre Thangaveru (National University of Singapore) “Trade, Investment Policy and FTAs in Singapore and ASEAN,” February 21.

Bhanupong Nidhipraba (Thammasat University) “The Tsunami and the Thai Economy: One Year After” ▽ Mahani Zainal Abidin (Ministry of Higher Education, Malaysia) “The Malaysian Economy under Abdullah Ahmad Badawi,” March 27 at Center for Contemporary Asian Studies Doshisha University.

## ◆ Special Seminar

Wang Hui (Tsinghua University, China) “Problematizing Asia: Reflections on the Re-emergence of the Discourse of Asia,” December 14. ▼ Mochtar Pabottingi (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Third World View of the Genealogy of Democracy: Theorizing from Indonesian, American, and Japanese Political Histories,” January 10. ▼ U San Thein (Ministry of Agriculture and Irrigation of Myanmar; Visiting Professor, IDE) “Agro-based Industry in Myanmar: With Special Reference to the Sugar Industry,” February 6. ▼ Ratana T. Boonmathya (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Cross-Border Marriages and Transnational Gender Mobility: Experiences of Village Women from Northeastern Thailand,” February 15. ▼ Pinit Laphthananon (Visiting Research Fellow, CSEAS) “The Role of Development Monks and Social Change in Northeast Thailand,” February 17. ▼ Pinkaew Laungaramsri (Chiang Mai University) “Rethinking ‘Locality’ in the Thai Social Movements: A Comparative Study of the Community Forest Movement and Anti-FTA Movement,” March 8. ▼

Khoo Boo Teik (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Can Better Governance Be All? Malaysian Politics since November 2003,” March 28. ▼ U Sai Aung Tun (Myanmar Historical Commission) “Traditional Culture in the Creation of Contemporary Myanmar,” April 21.

## ◆ 「比較の中の東南アジア研究」研究会

第4回例会：11月12日 山本博之（国立民族学博物館地域研究企画交流センター）「マレーシア・サバ州における民族概念の諸相」 ▽ 鳥居高（明治大学）「マレーシアにおける開発政策運営と担い手」 ▼ 第5回例会：12月17日 鬼丸武士（CSEAS）「戦間期、アジアにおける国際共産主義運動とイギリス帝国治安維持システム」 ▽ 飯島渉（青山学院大学）「宮入貝（オンコメラニア）の物語——日本住血吸虫病対策の歴史的含意」 ▼ 第6回例会：1月18日 久末亮一（東京大学）「華僑送金の再考——サンフランシスコとシンガポール：東西南北の広東系を例に」 ▽ 大石高志（神戸市立外国語大学）「インド・ムスリム商人とその広域ネットワーク」 ▼ 第7回例会：2月11日 佐藤仁（東京大学）「研究と実践——タイで考えたこと」 ▽ コメント：河野泰之（CSEAS） ▼ 第8回例会：3月22日 秋田茂（大阪大学）「1950年代の東アジア国際経済秩序とスターリング圏」 ▽ 濱下武志（CSEAS）「秋田茂著『イギリス帝国とアジア国際秩序』を読む」

## ◆ 「東南アジアの社会と文化」研究会

第25回例会：11月25日 細田尚美（ASAFAS）「フィリピンにおける『家族のための移動』再考——〈分け与えること〉をめぐる社会関係を手がかりに」 ▼ 第26回例会：2月10日 藤井美穂（ASAFAS）「ココヤシ栽培の小農社会における土地をめぐる社会関係——フィリピン・ルソン島ラグナ州『高地』の事例」

## ◆ 「東南アジアの自然と農業」研究会

第123回例会：12月16日 小泉都（ASAFAS）「ボルネオのプナン・ブナルイの民族植物学——狩猟採集民にとっての森林」 ▼ 第124回例会：2月24日 山口哲由（ASAFAS）「東南アジア大陸部からチベットにかけての生業構造の変化」 ▼ 第125回例会：4月21日 小笠原梨江（ASAFAS）「カンボジア稲作村におけるトムノップ灌漑をめぐる共同」

## ◆ 「農業経済と地域研究」研究会

12月19日 陳劍波（中国国务院発展研究センター、現アジア開発銀行研究所客員研究員）「中国農村金融の再建を求めて——農村金融の現状と改革の視点」

◆「東南アジア大陸山地部」研究会

12月26日 総合地球環境学研究所生態史プロジェクト 森林・農業班との合同研究会  
「ラオス北部における牛・水牛をめぐる」  
園江満 (CSEAS) 「ラオス北部における農耕と役畜——  
耕具に関する調査から」▽高井康弘 (大谷大学) 「ラ  
オス北部の人と水牛——放牧・流通・食肉に関する調  
査報告」

◆「地域情報学」研究会

「地域研究活動アーカイブ」第1回研究会：1月13日  
福井捷朗 (立命館アジア太平洋大学) 「自然科学者と  
地域研究——次世代へのメッセージ」

◆「タイ・バンコク」研究会

2月25日 鈴木佑記 (チュラロンコン大学客員研  
究員・上智大学) 「スマトラ沖地震津波後のタイの復  
興過程——『海民』モーケンに注目して」▽田中幸夫  
(東京大学) 「GEF IW:LEARN インターン中間報告——  
モデルおよびGISを用いた地上由来環境汚染物質動態  
の同定」

◆「いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク (あ  
いあいネット)」研究会

2月28日 スラウェシ研究会との共催  
「中スラウェシ——森をめぐる権利と慣習：『いりあい  
交流』の実践とその可能性」今北哲也 (NPO 木の会)、  
家中茂 (鳥取大学)、三俣学 (兵庫県立大学・コモン  
ズ研究会) <レジュメ参加> 島上宗子 (いりあい・よ  
りあい・まなびあいネットワーク)

◆「ジャカルタ」研究会

“Local Violent Groups and Politics in the Post-Suharto  
Indonesia,” March 11  
Okamoto Masaaki (CSEAS) Introduction and “Two Types  
of Security Brokers in Jakarta: Magical Violent Group from  
Banten and Japanized Professional Marine Security Company”  
▽ Untung Widyanto (Journalist from *Tempo Magazine*) “A  
Legendary Robinhood of Betawi: Habit of Thugs at Betawi  
Communication Forum” ▽ Abdul Hamid (Banten Institute)  
“Rawu Group’s ‘Jawara’ in Control of the Banten Local  
Politics” ▽ Abdur Rozaki (IRE Yogyakarta) “Social Origin and  
Power Politics of ‘Blate’ in Madura” ▽ I Ngurah Suryawan  
(Universitas Udayana) “Violent Business of Thugs with Dagger:  
Introductory Remarks on ‘Pecalang’ and Militia in Bali” ▽  
John Bamba (Dayakologi Institute) “Violent Groups in West  
Kalimantan”

◆「農村開発における地域性」研究会

第15回例会：3月31日 安藤和雄 (CSEAS) 「チベッ  
ト訪問 (2006年夏——アテーシャの縁の地の農業景  
観) (スライド映写会を中心に) ▽外川昌彦 (広島大学)  
「中世のベンガル社会におけるイスラーム——チャイ  
タニヤの行伝を通して見た」▽臼田雅之 (東海大学) 「バ

ウラ県のグラムデボタについて」

◆「国家・市場・共同体」研究会

3月31日 塩田光喜 (アジア経済研究所) 「パプアニ  
ューギニア化するパプアニューギニア——国家・戦士  
共同体・贈与」

◆「アジアの政治・経済・歴史」研究会

4月28日 龍谷大学アフラシア平和開発研究センタ  
ーとの共催。

Om Prakash (Delhi School of Economics) “Asia and the Rise of  
the Early Modern World Economy”

◆ API Seminar

“Environmental Issues and Activism,” March 30.

Moderator: Caroline Hau (CSEAS)

Opening: Tanaka Koji (CSEAS)

Narumol Aphinives (Green World Foundation, Thailand)

“Research on the Integration of Environmental Education

in to the School Curriculum in the Philippines and Japan”

▽ Darunee Paisanpanichkul (Environmental Litigation and

Advocacy for the Wants (EnLAW), Thailand) “Lessons on an

Environmental Litigation Case from the Philippines: Manila

Bay Case” ▽ Penchom Saetang (Campaign for Alternative

Industry Network (CAIN), Thailand) “CAIN Works and

Experiences in Thailand: Learning and Sharing through the

Japanese Campaign Stories”

来 訪 者

2006年1月16日 Eric Casino ▼1月30日  
K.V. Kesavan (神戸学院大学法学部客員教授)  
他1名 ▼1月31日 Chris Manning (オース  
トラリア国立大学インドネシアプロジェクトリ  
ーダー) 他1名 ▼2月23日 Tan Kok Kiong  
Andrew (シンガポール外務省副次官) ▼3月3  
日 Taweeep Chaisomphop (タマサート大学国際  
交流担当副学長) 他4名 ▼3月7日 Garry  
Rodan (マードック大学アジア研究センター  
所長) ▼3月20日 Endang Sukara (LIPI 副長  
官 = 生物科学部門担当) ▽ Bambang Subiyanto  
(LIPI 生物材料研究センター所長) ▼4月6日  
Arifin Wasaraka (チェンデラワシ大学副学長)  
▽ Naffi Sanggenafa (同大学人類学部長) 他2  
名 ▼4月21日 U Sai Aung Tun (ミャンマー  
歴史委員会副議長・ヤンゴン大学教授)

◇『東南アジア研究』43巻3号

*Southeast Asian Studies* 43(3)

Networks of Malay Merchants and the Rise of Penang as a Regional Trading Centre. Nordin Hussin ▼「なぜマングローブ林は再生したのか?—ベトナム, カマウ省ゴックヒエン県の湿地利用制度とインセンティブ」鈴木伸二 ▼「カンボジア, トンレサップ湖東岸地域農村における集落の解体と再編——村落社会の1970年以降の歴史経験の検証」小林 知 ▼「イギリス帝国治安維持システムとコミンテルン・ネットワーク——ルフラン事件(1931)を事例として」鬼丸武士 ▼現地通信(Field Report)「空を飛ぶ患者」加藤剛

◇『東南アジア研究』43巻4号

*Southeast Asian Studies* 43(4)

東南アジアを超えて——華僑・華人史研究のフロンティア「特集よせて」小泉順子 ▼「華僑・華人史研究をめぐる東南アジアと東アジアの連続と断絶」濱下武志 ▼「ネットワーク, アイデンティティと華人研究——20世紀の東アジア地域秩序を再検討する」劉宏, 廖赤陽 ▼「スペイン領

フィリピンにおける『中国人』——“Sangley,” “Mestizo”および“Indio”のあいだ」菅谷成子 ▼「インドネシア華僑・華人研究史——スハルト時代から改革の時代への転換」青木葉子 ▼「北アメリカの華僑・華人研究——アジア系の歴史の創出とその模索」園田節子 ▼「タイ中国人社会研究の歴史性と地域性——冷戦期アメリカにおける華僑・華人研究と地域研究に関する一考察」小泉順子

## 出版ニュース Publication News

◇研究報告書シリーズ (Research Report Series)

■ No.108. Wynn Lei Lei Than, compiled. 2006.

*Selective Annotated Bibliography of Books and Other Research Materials on Myanmar Agriculture.*

◇その他の出版物

■山田 勇. 2006. 『世界森林報告』岩波新書.

■小泉順子. 2006. 『歴史叙述とナショナリズム——タイ近代史批判序説』東京大学出版会.

### 図書室から 耳よりの情報

2005年度の東南アジア研究所図書室の活動から、利用者の皆さんに直接役に立ちそうな情報を簡単に紹介します。

#### 新規購入

例年行っているタイ、インドネシアに加えミャンマー、ベトナム、バングラデシュ、フィリピン、東ティモールの各国にて新刊本を中心とした出版物の購入を行いました。これらの資料に関しては、整理が終わり次第、東南アジア研究所図書室および附属図書館地下に配架する予定です。なお、統計資料に関しては、継続購入以外に以下を新規購入しました。

◎ベトナム

*Vietnam Statistical Data in the 20th Century* vol. 1-

*Result of Establishment Census of Vietnam 2002* vol. 1-3

◎ *International Population Census* (マイクロ資料)

オーストラリア国勢調査 (1976, 1981, 1986, 1991, 1996)

パキスタン国勢調査 (1981, 1998)

フィリピン国勢調査 (1990, 1995)

#### 資料公開

新規購入に加え、既所蔵資料を適切な形で公開していくことも、当図書室が積極的に取り組んでいる課題です。

◎インドネシア

数年前より購入を開始したインドネシア語のイスラム関係出版物の遡及入力を行いました。約30の出版社による1,000冊以上が、検索・閲覧可能です。図書室の分類は請求記号の初段が IV In-Is となっています。

◎タイ

タイで戦前に出版された以下の新聞3紙

*Krungdeb Varasab Daily News*, *The Siam Rashdra Daily News*, *Lak Mueang* のうち、東南アジア研究所所蔵分が附属図書館のデジタル・ライブラリーにて公開開始。

URL: <http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/b77/image/index.html>

2006年5月1日発行

発行 〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町46

京都大学東南アジア研究所

Tel 075-753-7344

Fax 075-753-7356

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>

編集 Caroline S. Hau・米沢真理子